

平成艸紙



おりおりの記

遠くて近い国々

国際協力機構 (JICA)
理事長

田中 明彦

新年早々、ブラジルとペルーに出張した。地球儀をみればわかるとおり、地理的には日本から最も遠い国々である。地球半周を飛行できる飛行機であれば、日本からいかなる方向に飛んでも同じくらいの時間がかかる地域ということになる。実際は、私はアメリカのアトランタ経由でサンパウロに向かったが、中東のドバイ経由というのもあり得るようであった。

この地理的に遠いブラジルもペルーも日本に親しみを持ってきている国である。その大きな理由の一つは、両国における日系人の方々の活躍である。ブラジルの日系人人口は150万人といわれ、社会の各分野で大変な活躍をしている人々が多い。今回お目にかかった政府関係の要人の中にも日本の姓を持つ方々が多かった。ペルーの日系人は、ブラジルほど多くないが、それでも9万人程度といわれる。フジモリ元大統領のご息女のケイコさんの名前は、リマのいろいろな所の政治ポスターで見られる。

戦前から戦後、南米の日系人社会は、それぞれ大変なご苦勞を重ねられてきた。困難で辛い状況のなかでも、一様に子弟の教育に力をそそぎ、それぞれの社会のなかで尊敬を勝ち得ていったのである。ブラジルでもペルーでも日系人社会の指導者の方々とお目にかかることができたが、みな大変な人格者である。ペルーの日系人の方々は、おおむね日本語よりはスペイン語をお話になるのだ

が、日本のどこかの地方の有力者の方とお話しているかと錯覚するほど違和感なく、通訳がはいっていることを忘れてしまうほどであった。

国際協力機構 (JICA) の仕事も、日系人社会の皆さま

んに大変お世話になってきた。1991年にJICA専門家3人がペルーでテロによって殺害されたことがあった。ペルーの農業試験場の皆さんが慰霊碑を守ってきていただいたのにも頭が下がったが、近くの日系人社会が経営している学校にも慰霊碑を作っていた。有り難いことである。

こうした日系人の方々のおかげで、ブラジルやペルーにとって日本という「遠い国」が近くに感じてもらえるのであろう。今回お目にかかることのできた両国の人々のかなりは日系人ではなかったが、みな一様に日本との関係が大事であると語ってくれた。日本国民の生活は、世界中との友好的な関係にかかっている。そのなかで、遠くて近い国々が存在することは、日本人全体の利益であらう。地理的な遠近にかかわらず友好国をつくることの大事さを感じた出張であった。

